



## (五) 条

佐田遺跡・南郷遺跡は、

いすれも古墳時代中期を中心とした集落遺跡で、多数の堅穴住居の

ほか、刀づくりに関わる工房、石垣を伴う大型建物や大壁住居などの遺構、韓式系土器・陶質土器などの遺物を検出しており、葛城氏

及び渡来系集団との関連で注目される。

- 1 所在地 奈良・下茶屋遺跡  
 2 調査期間 一九九三年(平5)六月~一二月  
 3 発掘機関 奈良県立橿原考古学研究所  
 4 調査担当者 坂 靖・福田さよ子  
 5 遺跡の種類 集落跡  
 6 遺跡の年代 繩文時代~中世  
 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

下茶屋遺跡は、御所市街地の南方約三km、金剛山の東麓に位置している。遺跡の北方約一kmには名柄遺跡が、南方約二kmには朝妻廃

寺、南方約三kmには鴨神遺跡などの遺跡が所在する。

さらに、下茶屋遺跡のすぐ西には、佐田遺跡・南郷遺跡という近年の大規模な県営圃場整備事業に伴う発掘

調査で明らかになつた遺跡がある。

佐田遺跡・南郷遺跡は、

下茶屋遺跡の調査も、南郷・佐田遺跡と同様、県営の圃場整備事業に伴うもので、試掘調査や事業計画に基づき、四カ所で本調査を実施した(第一~四地区)。調査面積は延べ約七五〇〇m<sup>2</sup>に及ぶ。このうち、木簡が出土したのは、第三地区と呼んでいる最も東に位置する調査区で、約三〇〇〇m<sup>2</sup>の調査を行なつた。

その結果、上層では弥生時代中期~中世の遺構・遺物、下層では繩文時代中期~後期初頭の遺物を検出した。

木簡は、上層の飛鳥~奈良時代の川跡(SXO-1)から出土した。川は、西から東へ流れ、幅一五m、深さ〇・六mほどを測り、東西約五〇mの長さにわたって検出した。川の中からは、七世紀前半(八世紀初頭にかけての大量の土器、木簡が出土している。木器には、斎串・農具(鋤)・容器(曲物、剖物)・建材・紡織器などが含まれていた。ほかに、小形鴨尾・滑石製子持ち勾玉・銀製帶金具・桃核などの遺物も出土している。

特に、鴨尾は高さ八・四cmを測る超小形品だが、作りは精巧で、底部に半円形の割り込みがあつて、厨子にのせられていたものである可能性がある。

飛鳥～奈良時代の遺構は、この川のほかには顕著なものはない。ところから、当該期の遺跡は、この川の上流、調査地の西側に広がっていたと考えられる。

## 8 木簡の积文・内容

(1) 「□□□所□  
〔看カ〕

・「□□□命□  
〔俱カ〕

(2) < 奴原五十戸」

(134)×(15)×4 081  
(160)×30×5 033

(1)は半截され、下部は折損。表裏の区別はできないが、仮に表とした面の字は裏面のそれに比し、やや小ぶりである。文書木簡とみてよい。(2)は上端部を失っているが、切り込みの一部分がわずかに残つており、付札とみられる。字配りからすると、上にもう一字あつた可能性が高く、「□奴原」という地名になると思われる。ただ、下茶屋遺跡の所属する大和國葛上郡には、『和名抄』の郷名などで「□奴原」に相当する地名は見当たらない。

木簡の年代は、里を「五十戸」と表記しており、七世紀後半と推定できる。これはSXO-1の年代とも矛盾しない。なお、SXO-1から出土した須恵器の断片(杯蓋か)に、「真廣」の墨書がある。

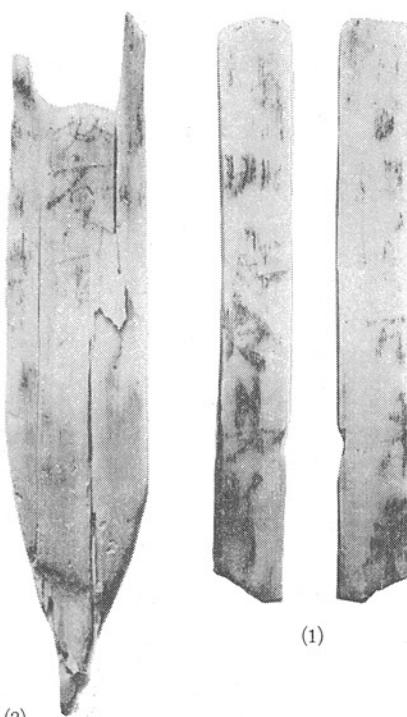
SXO-1から、木簡や墨書土器のほか、多量の土器・木器、斎串、帶金具、さらには小形鷦尾などが出土していることから、近傍に里

家の存在を想定できるかも知れない。式内大社で祈年祭とも深く関わる御歳神社に近く、また葛城川沿いをさかのぼって鴨神遺跡に至る古道「葛城道」が下茶屋遺跡の近くを通っていたと考えられるので、右の想定もあながち無理ではないだろう。

## 9 関係文献

奈良県立橿原考古学研究所「下茶屋遺跡発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報』一九九三年度 一九九四年)

(1~7~9)  
坂  
和田  
靖  
萃



(2)

(1)